

ヒッタイト語の指示詞 *a-* の機能について

— 関係節構造における指示詞 *a-* の統語論的特徴 —

松 川 陽 平

1. はじめに

ヒッタイト語の指示詞は、Puhvel(1984:5)も指摘しているように、直示的機能をもつ *ka-*‘this’ と *apa-*‘that’ の二項体系である。このことは、古期・中期・後期と時代区分されるヒッタイト語史全体を通して、それらの使用頻度が常に高いことから概観できる。

一方、ヒッタイト語には、*a-*‘the aforementioned’ という照応的機能をもつ指示詞も存在する¹。ただし、その出現頻度は、後期のテキストにおいて高くなる²。しかし、後期テキストにおいても、*ka-*や *apa-*に比べると、*a-*がテキストに用いられる回数というものは限られている。そのため、先行研究において、*a-*の統語論的観点からその機能を抽出するということはあまり試みられなかった³。

本稿の目的は、*a-*の統語論的な機能を考察するために、特に関係節構造における *a-*の統語論的特徴に注目し、その機能の一つを指摘することである⁴。

2. ヒッタイト語の関係節構造と指示詞 *a-*

2. 1. ヒッタイト語の関係節構造

次の例で Garrett(1994:41)が述べているように、ヒッタイト語の関係節構造は言語類型論的に接合(*adjoined*)タイプに属する⁵。

(1) KBo IV 9 v. 3-5

{^{Giš}ŠUKUR^{HIA}=ma ^U^{Giš}PA^{HIA} kue harkanzi} {nu=smas=at=kan
spears-but and scepters n-a-pl hold-3pl and-from them-them(antecedent)-ptc
1-as ^{LU}MEŠEDI arha dai}
one guard away takes-3s

‘But the spears and scepters that they hold, one guard takes them away from them.’

(1)では、それぞれ括弧で括られているように、関係詞 *kue* を含む関係節が前置され、主節が後置されている。

なお、括弧で括られている語群はそれぞれ一文を形成していて、厳密には、関係詞を含む「関係文」と「主文」がこの順番で並置されていると言わなければならない。しかし、本稿では便宜的にこれらの「文」を節と呼び、それぞれ関係節、主節で統一している。

2. 2. 関係節内での *a*-の統語論的特徴

前節で示したように、ヒッタイト語の関係節構造では関係節と主節が並置されている。このような関係節構造との関連において、*a*-には次のような統語論的特徴が指摘できる。すなわち、1) *a*-は関係節の方にのみ用いられ、主節に現れることはないこと、2) *a*-が関係節に用いられた場合、*a*-はその節の初頭（文頭）に現れることである。

(2) KUB V 1 III 48-49

48 {u-ni-us-za-kán **ku-e-es** Ú^{MEŠ} HUL-lu-us
 +oneself+(particle) which(c.pl.Ac) dreams bad(c.pl.Ac)
 us-ki-iz-zi} {IZKIM^{HI.A}-ya-za ar-pu-wa-an-ta
 see(ind.3sg.pres) omens+and+oneself unlucky(n.pl.N-A)
 49 ki-kis-ta-ri}
 become(med.3sg.pres)

“彼が見続けているその悪夢は、(すなわち) 悪い前兆が起こる（ことに関連している）。”

この例文では、*a*-の曲用形 *unius* は関係詞 *kues* を含む関係節中にあり、後続の主節にはない。さらに、*unius* は節の初頭に位置している。

(3) IBoT I 33 89

89 {e-ni-za **ku-e** IZKIM^{MEŠ} HUL^{MEŠ}
 +oneself which(n.pl.N-A) omens bad
 ki-ik-kis-ta-ri} {nu-za ma-a-an ku-it im-ma ku-it
 become(med.3sg.pret) and+oneself whether(conj) whatever(n.sg.N-A)
 na-at GAM ar-ha GAR-ru}
 and+it down(adv) away(adv) put(imp.3sg)

“起こってしまったその悪い前兆、それは何であれ、それを抑えるように。”

例文(3)でも、*a*-の曲用形 *eni* が関係詞 *kue* を含む関係節の中にあり、主節には位置しない。また、それは関係節の初頭で用いられている。以下の例文(4), (5), (6), (7)では、*a*-の曲用形 *asi* が使用されているが、例文(1), (2)と同様の統語論的パターンを示している⁶。

(4) KBo II 2 III 30

30 {a-si **ku-is** DU ^{URU}PÚ-na DUMU-an-na-as

who(c.sg.N) sungod Arinna city child

31 A-NA IK-RI-BI^{HIA} se-er SIxSÁ-at} 32 {nu ^DUTU^Š
to vow on(adv) ascertain(ind.3sg.pret) and sungod

pu-nu-us-sa-an-zi 33 ku-is IK-RI-BU sar-ni-in-kán}
ask(ind.3pl.pres) who(c.sg.N) vow compensate(ptc.c.sg.N)

“誓いによって確かめられた息子である Arinna 都市のその太陽神 (に関して。(主節はない))
彼らは私の太陽神に尋ねる。誰の誓いが報われるのか。”

(5) KIF 1. 210f. §5. 3 (KUB XIV 8: 378.II.A)

2 nu-za ma-ah-ha-an e-ni TUP-PA ŠA KUR ^{URU}Mi-iz-ri pí-ra-an
and+(particle) when(conj) tablet of land Egypt before(adv)

ú-e-mi-ya-nu-un na-at IŠ-TU DINGIR^{LM} a-ri-ya-nu-un
find(ind.1sg.pret) and+it with god ask(ind.1sg.pret)

3 {a-si-wa **ku-is** me-mi-ya-as IŠ-TU^{DU} ^{URU}Ha-at-ti
+(particle) which(c.sg.N) word(c.sg.N) with weather god Hatti city
i-ya-an-za}

direct(ptc.c.sg.N)

“私がエジプトについてのその粘土板 (文書) を見つけたとき、私は神に尋ねた。「天候神
とともに Hatti 都市に向けられたその言葉は…。」”

(6) KUB V 22, 19

16 hal-wa-as-si-is-kán EGIR GAM ku-x-x[
halwasssi bird(c.sg.N)+(adv) back down

17 na-as II-an ar-ha pa-it UM-MA[
and+he 2(c.sg.Ac) away(adv) go(ind.3sg.pret) as follows

18 i-par-wa-as-si ti-i-ya-u-en id-x[
iparwasssi bird step(ind.1pl.pret)

19 {a-si **ku-is** hal-wa-as-si-is I IR^{TI} ŠA DUTU^Š[^t]
which(c.sg.N) halwasssi bird(c.sg.N) 1 oracle of sungod

20 ku-it-ki i-si-ah-ta nu-wa MUŠEN^{HIA} SIxSÁ-an-du
any(n.sg.N-A) trace(ind.3sg.pret) and+(particle) birds establish(imp.3pl)

nu MUŠEN^{HIA} x[
and birds

“halwasssi 鳥が戻って…。彼は二羽の方へ立ち去った。以下のように…。我々は iparwasssi 鳥のところへ現れる。その halwasssi 鳥が太陽神の一つの神託…。彼はいかなることも追跡した。そして（言った）「鳥たちのことが準備的できているように。」そして鳥たち…”

(7) KUB V 24+XVI+III 7, 13

1 u-ni^mKur *Ū-UL-pát* e[-di-iz pé-e-da-az ar-ha
Kur not +(particle) place(n.sg.Ab) away(adv)
ti-it-ta-nu-mi(?)] 2 e-di-iz INIM-za *UL* k[u-it-ki
place(ind.1sg.pres) word(n.sg.Ab) not any(n.sg.N-A)
kar-pí-is-ta(?) nu MUŠEN^{HL.A}] 3 ar-ha pé-es-si-an-du x[
rage(ind.3sg.pret) and birds away(adv) give an oracle(imp.3pl)
4 II hal-wa-as-si-is-ma-kán EGIR[
2 halwasssi bird(c.pl.N)+but+(particle) back(adv)
5 pát-tar-pal-hi-is-kán[
pattarpalhi bird(c.sg.N)+(particle)
6 hur-ta-ya ku-it-ki na-as II-a[n
curse(c.sg.D-L) any(n.sg.N-A) and+he 2
6a SIxSÁ-at-wa
establish(med.3sg.pret)+(particle)
7 {a-si-kán ku-is pát-tar-p[al-hi-is
+(particle) which(c.sg.N) pattarpalhi bird(c.sg.N)
8 *AŠ-RI-ya har-ta}* nu IR[
place have(ind.3sg.pret) and

“私はその Kur をその場所から移さない。その言葉によって誰も怒らなかった。そして鳥たちが神託を示すように。二羽の halwasssi 鳥が再び…。pattarpalhi 鳥が呪いにおいて何かを…。そしてそれは二つの…。(そして言う。)それは定められた。」その場所をとったその pattarpalhi 鳥は…”

次の例文(8), (9)は断片的に残存しているテキストからの例である。これらの例でも、*a-(asi)*は関係詞(*kuit, kuin*)を含む関係節中にあり、かつ、その関係節の初頭に位置していることがわかる。ただし、今までの例と異なり、これらの例では、*a-*が実際の粘土板テキストの書き出しの部分で使われており、*a-*が確実に節の始まりに位置していることを示している。

(8) KBo VII 75 1

1 a-si ku-it al-ga[-
which(n.sg.N-A) ?

2 GISKIM-ah-ta GISKIM-it[
give an omen(ind.3sg.pret) omen

3 a-si Û^{TUM} HUL x[
dream bad

4 nu ma-a-an e-ni-is-s[a-an
and when(conj)

5 e-ni i-si-ya-ah-ta[
trace(ind.3sg.pret)

“... (である) その alga...が...。彼が前兆を与えた。前兆とともに...。その悪い夢が...。そしてその...が...とき、...。彼はそれを追跡した。”

(9) KUB XVI 65 Vs. I 1

1 a-si-za-kán ku-in x x x x x-as SISKUR x x[]a-as I-MUR[
+oneself+(particle) which(c.sg.Ac) ritual he saw

“彼が見た...その...儀式を...”

そのほか、断片的な例も含めて、以下の箇所において *a-*と関係節の同様な統語論的パターンが見られる: KBo V 8 Rs.III 3, KUB V 1 Rs.III 17, KUB VI 11 Vo 1, KUB VIII 57+KBo X 47 a.14, KUBXIV 20 7, KUB XXII.70.Rs.17, KUB XXVII 29 II 12, KUB XLIX 70 Rs. 13, KUB LVII 116 Z. 12, HT 25+KUB XXXIII 111: 343.II.B.

3. *a-*の関係節構造における統語論的特徴と談話機能との関係

ここで、ヒッタイト語の関係節構造内での関係節の役割と、節(文)の初頭の役割を示す。

まず、ヒッタイト語も含めたインド・ヨーロッパ語の関係節の談話的機能について、Holland and Ickler(1978:441)は、ヒッタイト語のような関係節が主節に対して前置されるような関係節構造では、関係節の機能は主節で言及される話題(topic)を確立したり、限定したりすることであると述べている⁷。

次に、ヒッタイト語の節(文)の初頭の談話的機能は、Garrett(1994:33)や Luraghi(1990:91)が指摘しているように、話題化(topicalization)である⁸。

ところで、前節において、*a-*の関係節構造での統語論的特徴として、*a-*は関係節の方のみ用いられ、主節に現れることはないことと、*a-*が関係節に用いられた場合、それはそ

の節の初頭に現れることが指摘された。

これらの *a*-の関係節内での統語論的な特徴と、関係節と節（文）頭の談話的機能の一致を考慮すれば、*a*-は、その機能の一つとして、それが照応・指示する先行詞・対象を話題として確立したり、限定するような、話題化の機能を有するのではないかと考えられる⁹。

4. 結語

以上のように、本稿では、ヒタイト語の指示詞 *a*-の機能の一つを主に関係節構造内での統語論的なパターンに基づいて考察した。その結果、その談話的機能として、*a*-は、それが照応・指示する先行詞・対象を話題化することを指摘した。

*本稿は、平成16年7月に受理された学位請求論文の一部を加筆・修正したものである。広島大学大学院文学研究科教授の今田良信先生、植田康成先生、竹島俊之先生、京都産業大学教授の大城光正先生にこの場を借りて謝意を表するものである。また、本稿の作成過程で、京都大学教授の吉田和彦先生からも貴重なご意見をいただいた。先生にもここで謝意を表したいと思う。なお、本稿の内容に関しては、筆者にその責任があることは言うまでもない。

注

1. Laroche(1979:151)によれば、*a*-の曲用パラダイムは以下のとおりである。

Sg.	m.f.	n.	Pl.m.f.	n.
nom.	asi	eni	unius	e(a)
acc.	uni	eni		e(a)
<u>dat.</u>	<u>edani</u>	<u>edani</u>	<u>edas</u>	<u>edas</u>
loc.		edi		
abl.		edez		
adv.		enissan		

2. 例えば、Friedrich-Kammenhuber(1975-)の *a*-の曲用形 *eni* の記述によれば、その形態は後期テキストから用いられる。

3. *a*-の統語論的な研究は、Friedrich(1925)に始まる。そこでは、*a*-は指示代名詞的よりも指示形容詞的に用いられることが多いことと、談話の中で一度述べられた名詞が、後にもう一度繰り返される場合に、その繰り返された名詞に対して、*a*-が前方/左側から形容詞的

に修飾するという統語論的用法が指摘されている。*a-*は、ドイツ語では“selbiger, besagter, erwähnter”と訳されている。

4. Friedrich(1974:68)によれば、ヒッタイト語には、*ka-*, *apa-*, *a-*のほかに、*anni-*という指示詞が存在する。しかし、その形態はシュメール語-アッカド語-ヒッタイト語併記の、いわゆる語彙テキストに一箇所(KBo I 42 III 33)用いられているだけである。
5. Garrett(1994:41-42)は言語類型論的な観点から関係節の統語構造を、ヒッタイト語のような関係節と主節が並置される接合タイプと、英語のような関係節が埋め込まれる(embedded)タイプに大きく分類している。
6. 次の例文では、*asi*の前に*nu*があり、そこから関係節が始まっているので、表層的には*asi*が節の初頭にあるとは言えない。しかし、Garrett(1994)も述べているように、*nu* ‘and’, *namma* ‘further’など、ヒッタイト語のいわゆる文修飾副詞(sentence adverbs)は統語論的機能に関与しない。そのため本稿でも、このような例の *a-*は関係節の初頭に位置していると見なしている。

HT 25+KUB XXXIII 111, 7-9

IM^{H1}. A-us wa-al-li-wa-al-li-us 4 ^DKAL-as

winds strong(c.pl.N) guardian deity(c.sg.G)
 i-da-la-u-wa ud-da-a-ar 5 A-NA ^DE.A KASKAL-si
 evil(n.sg.N-A) thing(n.sg.N-A) to Ea god road
 IGI-an-da pé-e-te-er 6 ^DE.A-as ^DKu-mar-bi-ya
 against(adv) carry(ind.3pl.pret) Ea god Kumarbi god+and

me-mi-is-ki-u-wa-an [da-a-is] 7 e-hu EGIR-pa
 say(supin) put(ind.3sg.pret) oh!(interj) again(adv)

pa-a-i-u-e-ni {nu a-si ku-in 8 ^DKAL-an
 go(ind.1pl.pres) and who(c.sg.Ac) guardian deity(c.sg.Ac)

ne-pí-is LUGAL-un i-ya-u-e-ni} 9 {nu a-pa-a-as
 heaven(n.sg.D-L) king(c.sg.Ac) make(ind.1pl.pres) and that(c.sg.N)

GIM-an ni-wa-ra-al-la 10 KUR.KUR^{H1}. A-ya QA-TAM-MA ni-wa-ra-al-la}
 when(conj) weak(c.sg.N) lands +and so(adv) weak(c.sg.N)

“強い風が守護神の悪事を E.A 神の道に逆らって運んだ。E.A 神と Kumarbi 神は言い始めた。(I) 見よ、我々は再び行 (って確かめる) つもりだ。我々が天の王としたその守護神は弱く、国々も同様に弱い。(J) ”

7. そのほか、ヒッタイト語の関係節の機能は Justus(1976)にも言及がある。また、関係節も含めた、ヒッタイト語の従属節全般の談話的機能については、Luraghi(1990:107-108)を

参照のこと。

8. Lyons(1999:230-231)は言語類型論的な視点から、文頭と話題化の関係を述べている：“If the topic is the point of departure for the message it is natural that it should come first. Syntactic processes which have the function of singling out the topic frequently involve fronting; this is the case in English with topicalization (*That friend of yours I really don't like*) and left-dislocation(*That friend of yours, I really don't like him*), as well as with topic-introducing frames like *as for, as regards, as far as ... is concerned*.”、“These fronting processes are extremely common in languages, serving either to place non-subject topics in the prominent sentence-initial position or to give additional prominence to a subject topic”、“Topicalization almost certainly involves movement to an initial position”
9. 本稿では取り上げなかったが、*ka-*、*apa-*にも関係節構造内での統語論的特徴が存在する。*ka-*は、*a-*と同様に、関係節に現れる強い傾向があるように思われる。しかし、次の例では *ka-*は関係節の初頭に位置しているが、それが *a-*と同様の *ka-*の傾向かどうかは現在のところ確定できない。

Stefanini(1965:46)

- 36 {ka-a-as-sa-za **ku-is** me-mi-ya-as ki-sa-at}
this(c.sg.N)+oneself which(c.sg.N) word(c.sg.N) happen(med.3sg.pret)
- 37 {pa-sa-at-tar-ma-as ar-ha pa-ap-pa-sa-i}
gulp(n.sg.N-A)+but+them away(adv) swallow(ind.3sg.pres)
- “発生したこの言葉を彼らは納得する。”

一方、*apa-*は、次の例文に見られるように、*ka-*、*a-*とは異なり、主節に用いられる強い傾向がある。

Kup. § 19 19

- 19 {[(tu-uk-ma ^DUTU^{SI} **ku-it** KUR^{TAM} AD-DIN)]} {nu-za
you(2sg.D-L) sun god which(n.sg.N-A) land I gave and+oneself
a-pa-a-at KUR^{TAM} pa-ah-si}
that(n.sg.N-A) land protect(ind.2sg.pres)
- “太陽神の私^ががあなたに与えた国、その国をあなたは守る (=太陽神の私^ががあなたに与えた国をあなたは守る)。”

このように、関係節構造の中では、*a-*、*ka-*が *apa-*に統語論的に対立している。また、*ka-*にも、*a-*と同様に、話題を確立する機能があるが、現在のところ、それらの意味論的な使

い分けの基準は不明である。

参考文献

- Friedrich, J. 1925. Zwei neue hethitische Pronominalformen. *Zeitschrift für Assyriologie und verwandte Gebiete* 2. 286-296.
1974. *Hethitisches Elementarbuch* I³. Heidelberg: Winter.
- Friedrich, J. - A. Kammenhuber. 1975-. *Hethitisches Wörterbuch*. Heidelberg: Carl Winter.
- Garrett, A. 1994. Relative Clause Syntax in Lycian and Hittite. *Die Sprache* 36.29-69.
- Holland, G. and N. Ickler. 1978. Some observations on Relatives and Demonstratives. *Proceedings of the Forth Annual Meeting of the Berkely Linguistic Society*, February. 18-20.
- Justus, J. 1976. Relativization and topicalization in Hittite. *Subject and Topic*, ed. Ch. Li, 214-245. New York: Academic Press.
- Laroche, E. 1979. Anaphore et deixis en anatolien. *Hethitisch und Indogermanisch*, edd. E. Neu und W. Meid, 147-152. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- Luraghi, S. 1990. *Old Hittite Sentence Structure*. London: Routledge.
- Lyons, Chr. 1999. *Definiteness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Puhvel, J. 1984. *Hittite Etymological Dictionary* 1/2. Berlin: de Gruyter.
- Stefanini, R. 1965. KBo IV 14=VAT 13049. *Atti della Accademia Nazionale dei Lincei, Rendiconti, Classe die Scienze morali, storiche e filologiche* 20. 39-79.